

長期投資の有名な方法 ～ドルコスト平均法とは～

令和3年12月作成



今回は投資において、時間分散と銘柄分散が大事であるというお話をしました。今回は時間分散において、有名な投資手法である「ドルコスト平均法」について簡単にお話してみたいと思います。

まず、通常株式等を購入する場合、単価 500 円の A 社株を 100 株、5 万円で購入するというような買い方をします。時間分散で翌月は A 社株の単価が 440 円に値下がりしたので 100 株を 4 万 4 千円でかう、翌々月には 530 円に値上がりしていたので、100 株を 5 万 3 千円で買う、というような買い方になると思います。しかし、ドルコスト平均法ではこのように毎月 100 株ずつ買うという方法ではなくて、毎月 5 万円と決めたら、毎月同じ金額 5 万円分の株を購入するというやり方です。たとえば、最初は 5 万円で 100 株、翌月は 5 万円で 114 株（端数切上げ）、翌々月は 5 万円で 94 株（端数は切捨て）と言うような方法で購入する方法です。この方法の優れているところは、価格が高いときには株数を少なく購入し、価格が安いときには株数を多く購入することが出来るという事です。上記の例では 3 か月の合計は以下のようになります。

価額			総購入額	3か月後評価額	利益額	利益率	
初月	翌月	翌々月					
500	440	550	147,000	159,000	12,000	7.5%	
			ドルコスト平均法	150,000	163,240	13,240	8.1%

上記のとおり、毎月 100 株ずつ購入するよりも利益率が高いことがわかります。しかし、投資商品の値動きは上記のようになるとは限りません。次に、株価が下落傾向にある場合はどうなるのか、下記の表で検討してみましょう。

価額			総購入額	3か月後評価額	利益額	利益率	
初月	翌月	翌々月					
500	550	440	147,000	132,000	▲ 15,000	-11.4%	
			ドルコスト平均法	150,000	135,520	▲ 14,480	-10.7%

上記のように、最新時点の株価が下落している場合には、損をしてしまうこととなります。しかし、注目すべき点は、仮に損失が生じた場合にも、毎月 100 株ずつ購入した場合より損失の割合を少なく抑えることができているという点です。

今回はあくまで、3 回購入した場合の短期間のシミュレーションですが、気になる方はもっと長期間のシミュレーションを行ってみると、多少の違いはあれども、似たような結果が得られると思います。

ドルコスト平均法は優れた投資手法ではありますが、あくまで投資である以上、損失の発生を確実に避けられるということはありません。しかし、同じ時間分散を行う投資方法としては、他の投資方法に比べて価格変動リスクを軽減する効果は期待できます。

また、今回の説明は便宜上株式を例にとりましたが、この方法は個別株の投資方法としてはあまり使い勝手がよくありません。投資商品の中には、このドルコスト平均法で購入する投資信託などがあります。iDeCo（確定拠出年金）や積立 NISA などが、例として挙げられますが、金融機関が提供する投資信託等商品の中にもドルコスト平均法を行っているものがあります。ドルコスト平均法での投資をご検討の方は、そういう観点から投資商品を探してみるのも一つの方法だと思います。